

紙上安原地区文化祭

新型コロナウイルス感染拡大のため、今年も安原地区文化祭・ひろばまつりが中止となりました。そこで、紙面で日頃の皆さんの活動の成果をご紹介します。



車いすダンス舞フレンズ



一二三会



松本民踊連盟



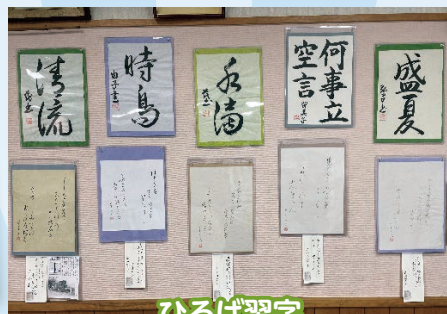
日中フレンドシップクラブ



ステップ21



ひろば短歌



ひろば習字



デジカメ百景



アートクラブ洗濯船



ピーナッツの会



手編みの会



橋倉家住宅外観

松本市文化財課は10月16日、17日、県宝に指定され、安原地区の宝でもある橋倉家住宅の見学会を開きました。文化財課では、文化財をもっと活用しようという中で初めての試みでしたが、東京から訪れた人もあり、2日間で115人が訪れました。

橋倉家住宅は江戸時代の武家屋敷の形式を残し、土間から6畳間、下座敷、上座敷と続いています。安原地区歴史研究会のみなさんがガイド役となり見学者に「こ

地域の宝、橋倉家住宅をもっと身近に！

橋倉家住宅見学会を開催！



ガイド役から説明を受ける見学者

安原地区に住んでいる女性は「丁寧の説明してくれて、江戸時代の暮らしぶりを想像できた」と語っていました。夫と小学生のお子さんと一緒に訪れた女性は「昔の武士の生活の様子を知ることができた。安原にゆかりがある木下尚江、近藤次繁博士の話も聞けて、身近なところの歴史を知りたい機会だった」と満足した顔で話していました。

の襖を開けると階段があつて、二階の部屋へ行けます」「ここから庭が見え、奥に便所があります」と丁寧に説明していました。

橋倉家住宅で秋の読書会 「木下尚江「墓場」を読む」

10月31日、太白町・中ノ丁・東ノ丁3町公民館と安原地区歴史研究会共催で、橋倉家住宅を会場に木下尚江(1869-1937)の「墓場」を読む読書会が開かれました。

太白町出身の木下尚江は自由で平和な社会を目指して活動した人物で、毎日新聞社を退社して東京から松本に帰郷した38歳のときのことを素材にして書いた小説が「墓場」です。主人公の正治は尚江、当時の



床の間に展示された尚江に関する資料



松本や生家周辺の様子も描写されています。

東ノ丁に残る県宝橋倉家住宅を地域の皆さんに活用してもらおうと企画され、午前と午後の2回で24人が参加しました。松本市歴史の里に移築された尚江の生家は、橋倉家と同じ造りだそうです。

4人が手分けして朗読する4章と5章を味わい、背景の説明を受けることで一段と小説の理解が深まります。「明治の人の秘めた奥ゆかしい気持ちにじんときた」「いつも歩いていてる場所が舞台で身近に感じた」などの感想が聞かれました。

いちよう並木

数々の呼び名を持つ彼岸花の秋の彼岸のころ、一斉に炎のように赤く燃えて咲く彼岸花、情熱的でもあり怖い印象も感じます。

ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草、耐寒性に富み丈夫で日当たりと肥えた土壌を好む植物。田んぼの畦道や土手、墓地等、人里に近いところで群生して咲く姿はみごとです。別名を曼殊沙華・幽霊花・死人花など地方によって色々と呼ばれ、呼び名からして屋敷内に植えることを大変嫌う地方もあります。



別名 曼殊沙華

球根から花茎が現れ細長い花被片は外側にそっくり返り朱色で奇妙な形状の不思議な咲き方をします。花後は葎や水仙に似た葉が伸びるを待ち、その後、葉が枯れ姿を消し、秋の彼岸に合わせたように花茎が現れ葉っぱは見当たらずに花だけが咲く異国情緒豊かな植物です。

「赤い花なら曼殊沙華オランダ屋敷に・・・」子どもの頃、歌の歌詞から連想、墓地に咲く花を見ると寂しく怖い思いがよみがえりました。

白花種もあります。